ISSBN0286-312X
専修大学社会科学研究所月報
No. 549
2009. 3. 20

晴耕雨読の暮らしが待っている

－定年退職を迎えて－

内田　　弘

目　　次

(1) 担当科目とゼミナール …… 2

(2) 学生寮・長洲ゼミ・演劇部・インターゼミ・卒論 …… 4

(3)『現代の理論』・『資本論』研究 ― 専修大学入職まで ― …… 8

(4)『経済学批判要綱』研究・自由時間研究・三木清研究
― 専修大学入職以後 ― …… 21

おわりに …… 26

編集後記 …… 32

定年退職を目前にした気分は独特のものである。向こうからやってくるような、こちらから近づいてゆくような、そんな感じである。卒業直前の気持に似ているが、やや違う。これからの計画はあるが、まだそれと正面から取り組む時ではない。その気もない。とにかく、これまでの教育のこと、研究のことを記そう。書くことによって、新たな出立の足場を固めるのだ。

(1) 担当科目とゼミナール

若い学生を沢山相手に話ができるということは、なんと重要で貴重な仕事であることか。若者は将来そのものなのだ。彼らに期待できなくて、なにに希望がもてるのか。そう自分に言い聞かせてきた。その意味で、本学在職34年間は幸せであった。私の講義の受講生は平均して年間約1000人、在職34年間で約34,000人であろう。昔は特に多かった。1000人を超え1500人を超えた年もあった。最近は少なくなった。とはいえ、この最後の2008年度も800人近い。多いことは自慢ではない。制度上のほぼ変わらない条件であった。学生を「偏差値」でみたことはない。教員の「偏差値視線」に学生は敏感ではないか。そう見ると、学生の発展可能性を予め封じ込めることになる。「みなさんに、もし偏差値で劣等感があれば、つまらない。捨てなさい」と学生にいってきた。学生を奮い立たせようと心がけてきた。教室に熱いものが流れた。単位認定は甘くはなかったが、極度に厳しくはしなかった。同僚だった内田義彦さんは「内田(弘)さん、学生には逃げ道を空けておかないとね」と入職直後の私に助言した。私の《若さからくる要求高さ》を懸念して、であろう。内田義彦さんは、ほとんどの教員が年下の同僚を「＊＊君」と呼んでいた時代に「＊＊さん」と呼んだ。内田さんの市民社会論は理論止まりではない。私も内田さんに学び、同僚を「さん」で呼んだ。加えて、徒党は組まない(竹内好)。直接当人に言えないことは陰でも言わない。そう心がけてきた。私の職場のモラルである。

担当科目は当初、教養科目の「社会科学論」であった。その後、専門科目の「ゼミナール」、「経済原論(入門)」、「経済倫理学」、「資本主義発展の理論」、「入門ゼミナール」などを担当してきた。使ったテキストは、「社会科学論」では最初は内田義彦さんの『資本論の世界』と『社会認識の歩み』であった。『歩み』の重層的に循環する論理構造は、教えながら、じっくり味読した。影響を受けているだろう。他の科目で『《経済学批判要綱》の研究』・『自由時間』・『三木清』を出版しテキストに使ったこともある。テキストの類の本は書かなかった。用いなかった。私の場合は、味の無いスープを学生に飲ませているような気分になる。講義に力が入らないのだ。内田義彦さんのあの2冊の本は予め教科書として書かれたのだろうか。

ゼミナールは最後のほぼ10年間は2つもった。応募者が増えたためである。1クラス2・3・4年次生合わせて30人強、合計60人強であった。ゼミ面接の冒頭で「これは一種の見合いです。皆さん学生もゼミを選び、教員も学生を選ぶ。対等ですね。縁がないときには、是非、別のゼミに入ってください」と学生にお願いした。年度始めにゼミ生の顔写真をとって、ゼミでそれを手元に顔と名前が一致するよう努めた。最後の10年くらい、ゼミのテーマは「仕事について考える」であった。年度始めに「ゼミ活動年次計画書(案)」を提示し、学生と協議して決定し実行した。ゼミでは学生にまかせて、あまり発言しなかった。そのかわり、学生の発言はすべて

メモし、ゼミの最後にそれぞれ発言者の名前を挙げて、コメントした。ⓐ**テキスト**は最近、藤本隆宏『能力構築競争』(中公新書)・畑村洋太郎『失敗学』(講談社文庫)・『仕事力』(朝日新聞)・西岡常一『木に学ぶ』(小学館文庫) など、職業に関する本を使った。ⓑ**職場見学**も行った。東電川崎火力発電所、東芝府中製作所、キューピーマヨネーズ、ライオン歯磨小田原工場、川崎市多摩区役所、東生田小学校、森永製菓川崎工場、登戸消防署、岡本太郎記念館などである。現場の緊張感がよい。内田さんが他分野の専門家と好んで対談していたことを思い出す。ⓒ「**ショート・スピーチ**」もおこなった。《①はっきり・②ゆっくり・③大声で・④キーワードを用いて・⑤順序良く・⑥表情豊かに、話しましょう》、これが内田ゼミの「ショート・スピーチ心得」である。これは一種の実践論理学と位置づけた。話し言葉能力を育てることもねらった。「自己紹介」・「私の職業観」・「父の仕事、母の仕事」・「私の得意科目」などのテーマを予め決め、各ゼミ生が立ってショート・スピーチを行い、学生と私がコメントした。ⓓ**時事問題**の報告・討論も行った。ⓔ**ゼミ合宿**は年に 2 回、ゼミが 2 つのときは、合同討論会を行った。ⓕ**就職活動**では学生は自力で内定を獲得してきた。人間が大きく成長して帰ってきた。学生は内定獲得までの就職活動のスピーチも行った。下級生は注視して聴き入った。就職内定率はほぼ 9 割以上である。残る 1 割弱もつぎの年には就職した。《教え子を路頭に迷わせない》、これは私の以前からの信念である。

内田義彦さんは在職の頃、私の研究内容についての質問は全くせず、教育についてよく質問した。まだ 18 歳人口減が問題にならず「教育は各教員の城」と思われていた頃である。内田さんは「ゼミではなにを勉強しているの？」と質問したことがある。ある夕刻、帰路の教職員バスの中のことである。「ボッブズの『リヴァイアサン』の第 1 編と第 2 編を読みましたが、今はスミスの『国富論』です」と答えたら、「『リヴァイアサン』の第 3 編、第 4 編はどうしますか」と質問された。宗教哲学と宗教政策の個所である。「学生にとって市民社会形成の論理を理解することが大切ですから、そこは省きました」と応えた。内田義彦さんは、ほのかに遺憾の色を浮かべた。いま思えば、特に「第 4 編 暗黒の王国について」は植民地先住民への宗教政策論であり、当時から抱いていた「(第 1 次)市民革命は対外的には帝国主義として発動する」というテーゼの研究に欠かせない個所であった。クロムウェルのアイルランド支配史や、アメリカ独立＝市民革命後の西部＝外地の開拓史は帝国主義史である。明治維新直後の帝国日本軍の韓国江華島攻撃などの出来事を理論化する必要があると感じていたのに、である。

そのバスで、内田さんに私がゼミで読んでいる『国富論』第 2 編の序説(Introduction)について、ゼミ生から「分業が発達すると生産力が上がり、生産力が上がると分業が広がる、とスミスは書いていますが、どちらが先なのですか」と尋ねられましたというと、内田さんは眼を丸くして「ほほぉ、すごい質問ですね。けれど、二回目はちがいますね」とあっさり言った。人

間は同じことを為す場合でも、過去の経験と比較し改善しようとする。人間がなす社会も単純な繰返しではない。経験は深まるのである。経験の問題は三木清の構想力論研究につながった。

(2) 学生寮・長洲ゼミ・演劇部・インターゼミ・卒論

［学生自治寮生活］　私の学問入門は男子学生寮生活から始まる。学生自治寮であった。横浜市南区清水ヶ丘にあった。富士山がよく見える丘にあり「富士見寮」といった。大学は東隣にあった。入学＝入寮が 1958 年 4 月、卒業＝退寮が 1962 年 3 月である。男子学生寮で 4 年間生活した。入寮の最初の日の夜に、同室（旧寮２階 6 号室）の 1 学年上の長崎市出身のＫさん（後に一緒に演劇部を創設する親友）はいきなり「内田さん ― Ｋさんも「さん」づけで呼ぶ ― 漱石をどう読んでいますか」と質問して私を驚かせた。少し戸惑ったが、私が「漱石の一連の悲恋物語は明治国家への批判ではないですか」と応えたら、無言で私を見つめた。Ｋさんとはすぐ意気投合した。ことあるごとに、家族にかつての学生寮生活を語った ― とは彼の通夜の遺族の話である。私は高校時代、漱石『こころ』に魅了され英訳を試み、北星堂版の翻訳（*KOKORO*, translated by Ineko Sato, 1941）で拙訳を確かめたことがある。或る友人とは文学書を貸し借りして読みあい論じあった。友は伸びやかな気品ある字を書いた。私は高校では音楽部交響楽団でホルンを吹いた。ベートーベン五番「運命」、シューベルト「未完成」、チャイコフスキー「白鳥の湖」、ロッシーニ「セビリアの理髪師・序曲」、ビゼー「カルメン組曲」などの演奏に参加した。隣県の交響楽団の影響もあって、県内地域演奏旅行が 3 年生の大学受験が控える（1957 年）12 月 25 日のクリスマスまで続いた。オーケストラで、最初にアンサンブルの基本を会得した。

寮生とは生活の苦楽を共にした。学生寮の食堂で貧しい飯を一緒に苦笑しながら食った。金の貸し借りをした。アルバイト先を紹介しあった。彼らとは互いに守り合った。良く飲み語った。寮祭で演劇を上演した。国会にデモにいった。私は善良な人間というものを知っている。正義は生活に根ざさなければならない。この真実を寮生生活で身につけた。3 年次生のとき演劇部の部長になった。寮長にならないかと推薦されたが、部長を優先し副寮長を担った。寮生大会（学生自治寮の全員参加の最高決議機関）はアルバイトの関係で 1 ヶ月 1 回土曜日夜 10 時から始まり早朝に終わった。寮生の退寮処分が議題のときなどは激論になった。寮室では新聞（朝日新聞）を一つ取り読み回した。夜、家庭教師のアルバイトから帰ってくると、寮の部屋で新聞記事の論評が始まる。デートもできない「警職法」、戦犯・岸信介による「1960 年安保条約改定」が迫ってきた頃である。議論に入るには、受験勉強など何の役にも立たなかった。ショックであった。もっと深い勉強をしなければと思った。2 年次生の秋、同室だった長野県出身のＩさんに自分の属する「長洲ゼミに入らないか」と勧められた。入ろうと思った。横浜国立大学

経済学部、長洲ゼミは人気ゼミであった。競争率は毎年、3倍強であった。

［ゼミ面接試験］　長洲一二先生とのゼミ面接試験は、横浜市南区清水ヶ丘の上、1959年(昭和34年)の晩秋の夕刻、6時を過ぎていた。温かい研究室に入ると、にこやかに迎えてくれた。はっきり覚えているのは、つぎのような先生との問答である。「いままで、何を勉強してきましたか？」と長洲先生。「この(2年次生の)夏休み、マルクスの『資本論』第1部をノートして読みました」と私が答える。先生は「ほほう」とほほえみ、「『資本論』を読んで、なにに役立てたいの？」と問い返した。「日本の将来を考えるためです。先生は日本の移行論を構想していらっしゃると伺いました。それを学びたいと希望しています」と私。先生「ところで、ご両親は元気ですか」。私「はい、父は国鉄職員でしたが定年で退職し、いまは年金生活です。母は主婦です。私はアルバイトと奨学金で、富士見寮に生活しています。今年の春、演劇部を創りました」。先生「分かりました。面接はこれで終わります。ごくろうさま」。実際は先生とはもっと込み入った話し合いをしたという実感がいまも残る。というのは、私と意気投合したせいか、先生の眼は暖かく光っていたのである。私は「ありがとうございます」と礼をいって研究室を出たとき、「受かった」と直感した。不思議なことに、先生の研究室の書架に『福澤諭吉全集』(岩波書店)がずしりと置いてあったことを鮮明に覚えている。翌日、教務課の壁に貼られた合格発表の用紙に「内田弘」の名前を確認した。

［演劇部創設］　演劇部は寮同室のＫさんたちと立ち上げた。いまでも毎年、同窓会で歓談している ― Ｋさんはもういないが。ブレヒト、サルトル、福田恒存などを上演した。私は恒存の『龍を撫でた男』を演出した。演劇部部員は一緒に上演する戯曲を精読した。一言の台詞、ト書きの意味を「場」・「幕」・「戯曲のテーマ」という三重の文脈で読んだ。その記録を演出ノートにした。このテキスト解読法はその後の研究生活に活きた。ブレヒトのスペイン人民戦線劇『カルラールのおかみさんの銃』の加藤衛訳が何ヵ所かがおかしいと判断する部員がいて、加藤先生を訪ね、セリフの書き直しを求め了解を取った。若さである。上演準備中、部室などの日常会話で洒落に戯曲の台詞が出てくる。部員一同、爆笑する。部内機関紙も刊行した。部外の学生にも配った。演劇部がアンサンブルを学んだ第2の場である。

［『資本論』輪読］　ゼミは3年次からである。ゼミでは『資本論』「第1部 資本の生産過程」を輪読した。テキストは青木書店から5分冊で出ていた長谷部文雄訳である。リポーターが、ガリバン刷りの報告書で、決まった範囲の内容の要旨を説明し問題提起を数点おこなう。参考文献も挙げなければならなかった。ゼミは午後2時半から午後5時20分ごろまで、3時間ぐらい続いた。長洲先生は最初のゼミで「価値の自立化という観点から読むのもひとつの読み方じゃないかな」といった後は、ほとんど発言しなかった。じっと黙って聴いているだけである。その代り、助手で入職されていた高島光郎先生 ― 高島善哉さんの令息 ― が助言しくれた。価

値形態＝交換過程論のところで、ゼミ生(全員 3 年次生)のほとんどが、順序時間＝歴史的時間説に固執した。順序時間には歴史的時間しか存在しえず、論理的時間が存在することを想定できなかった。私ひとりが孤立ぎみに「論理的時間も独自に存在する、ここではその時間で考えるべきだ」を主張した。高島先生がやんわりと私を支持した。ゼミ生は意外な顔をした。第 1 部を読み始めて数ヵ月後、長洲先生に私は「『資本論』はどのような経過で生まれたのでしょうか？」と質問した。『資本論』形成史の問題である。先生は少し間をおいて「さあ、どのようにしてかな」といって、ほほえんだ。先生はすでにその研究を初期マルクスから着手し、私はその論文をほとんど読んでいた。まもなく、学園も《安保反対、安保反対》と騒がしくなる頃(1960 年 5～6 月)である。《岸内閣を倒せ》と叫び国会に教学共闘でデモにいった。長洲先生も一緒である。国会の周囲で、「長洲君、演説をやってくれ」と老教授が声をかけると、先生は一同を前にしてアジテーションをおこなった。品の良い熱くなる演説であった。長洲先生はそのころ助教授であった。先生から講義では「経済学史」と「日本経済論」を学んだ。

［インターゼミ］　ゼミ 4 年次生のときは日本資本主義論(日本経済論)がテーマであった。全国大学経済系インターゼミがその年(1961 年)は九州大学で開かれた。まだ、水俣病が風土病と誤解されていた頃である。共通テーマは「日本経済」であった。私たち長洲ゼミの論戦相手は東京大学の安藤良雄ゼミであり、チューターは九州大学の高橋正雄先生であった。高橋先生はあいさつで「近くの八幡製鉄を見学しなさい」と助言した。長洲ゼミの総括報告は私が行った。論争点の一つに、私たちの報告にある「日本経済の二重構造の前近代性」とはなにかがあった。安藤ゼミの一人が「封建遺制のことではないか？」と質問してきた。私は「農地解放、財閥解体、軍閥解体などの戦後の改革で実体が無くなってもなお残る慣習である」と答えた。質問者は納得しないとの表情をみせた。「質問が古い、答えはあれで良いよ」と、壇上から長洲ゼミ・グループの座席もどってくる私に、リーダー格のＹが小声でささやいた。ゼミがアンサンブル学習の第 3 の場である。

［卒業論文］　長洲一二先生は 4 年次生のとき、ポール・スィージー編集の *Monthly Review* をゼミ生に回覧させた。「新しい資本主義」がテーマであった。（手書きで）コピーしてもよいと許可してくれた。写して夏休みにそれを訳し秋に提出すると、数ヵ所について「ぼくなら、そこをこう訳すね」と批評してくれた。卒業論文は他のほとんどのゼミ生が日本経済論に取り組んだ。私のテーマは「現代と初期マルクス研究」であった。人類全体を脅かす核兵器体系を現代の労働の疎外形態ととらえ、その理論を『経済学･哲学草稿』に求めるというテーマであった。原水爆禁止運動が盛んだった頃である。『草稿』のテキストは、郷里の古書店で買った「マルクス・エンゲルス選集版、補巻 4、1955 年」をつかった。訳者名は印刷されてない。初期マルクス研究は、長洲先生の論文「K. マルクスの『ヘーゲル国法論批判』について」(1953 年)や

「『独仏年誌』におけるマルクス」(1955 年)などを読んでいた影響かもしれない。卒論は 400 字詰め原稿用紙で約 200 枚書き、製本して提出した。卒論を先生に提出して卒業した年の 1962 年の 10 月、「キューバ危機」が襲う。核兵器で人類が死滅する危機である。すぐに卒論を思い出した。あれから 50 年近くたっても、核兵器問題は未決である。長洲先生はゼミで私の卒論を褒めたが、卒業を前にした私を研究室に呼び、就職先の産業を勉強しなさい、と私を諭した。当時、先生は教え子が学者になることに賛成しなかった。それより、実際の仕事の現場で《生産力の担い手》になることを勧めた。先生が『現代日本産業講座』(岩波書店)の「総論」と「結論」を執筆し、『日本経済入門』(光文社、1960 年)を出して、ベストセラーになったころである。先生には日本の当時の経済学は現実に取り残されているとの危機感があったと思われる。《21 世紀に生きよ、人との出会いを大切に、1 ヶ月に 1 冊の本を読め》、これが先生の私たち卒業生へ贈った言葉であった。私は、いま真に 21 世紀に生きているだろうか。

［長洲先生の政治哲学と知事出馬］　「日本に欠けているのは政治哲学である」とは、教壇からの長洲先生の話であった。その欠如を補うべく自ら、神奈川県知事に出馬し見事、圧勝し当選した。立候補声明の直前に「現代の理論社」(後述)の私たち同人が東京の或る場所に集合し出馬を祝った。母校でゼミの OB が出馬祝賀会を開いた。長洲先生は皆の前で立候補演説のような話を 2 時間 30 分くらい続けた。その途中で、ゼミの幹事が「先生、お疲れになりますから」といっても、笑顔で「いや、話は半分残っています」といって止めない。闘志満々である。5 期 20 年の長洲神奈川県政は今日の地方自治のモデルである。「地方分権」を最初に主張したのも長洲先生である。保革を問わず地域に根ざした政治・行政を追求すると、「長洲神奈川県政モデル」にゆきつく。「神奈川サイエンスパーク(KSP)」もその成果である。KSP はいまユーラシア工業化のアドバイザーである。現在 KSP の名誉会長であり長洲知事を副知事として支えた久保孝雄氏の『知事と補佐官』(敬文堂、2006 年)は、長洲県政の見事な総括である。

いままで「長洲一二先生」と書いてきたが、私たち長洲ゼミ生は長洲一二先生を「先生」とは呼ばない。「長洲さん」と呼ぶ。別に申し合わせたわけではない。そう呼ばれることを長洲さんは喜ばれた。長洲さんは、一橋大学の高島善哉さんの戦中の教え子である。卒論のテーマは「ヘーゲルの市民社会論」である。高島さんは戦中、マルクスの『剰余価値学説史』を翻訳しているとき、その原稿を官憲に押収された。長洲さんは戦後、『剰余価値学説史』を訳し国民文庫から出した。恩師の敵に一矢を報いたのである。これも学恩の表現であると思い知った。長洲さんの融和な表情の裏には剛毅な精神が控えている。長洲さんが還暦を迎えたとき、ゼミ生で研究者になった者たちが『現代資本主義と多元社会』(日本評論社、1979 年)と題する還暦論文集を出して祝った。長洲さん自身は「《地方の時代》を求めて」と題する『世界』に掲載した論文(1978 年 10 月号)を転載した。そこで、これからの日本は地方自治体が中心となるべき必

然性を主張した。私はその記念論文集に『経済評論』(1979 年 5 月号) に掲載した「多元社会と修辞学的問題性」を発展させた論文「多元社会日本の思想像」を載せた。そこで「田中角栄・ロッキード事件」を素材に、日本社会は「ホッブズ的自然状態からスミス的市民社会へ」という変貌過程に入ったと指摘した。その変貌はいまも進行中であると思う。長洲さんが逝去したあとの今も、ゼミ生は年に 2 回、研究会を開いて親睦を暖めている。参加者はいつも 50 人前後である。長洲さんは、あの満面の笑みを浮かべているにちがいない。

その論文集の論文のもとになった『経済評論』論文「多元社会と修辞学的問題性」を読んだ内田義彦さんは、本学の教員室(生田校舎 2 号館 2 階)で内田さんの前に座る私に何も言わず、私をただじっと見つめた。おもしろい論文を書いたね、という意味であろう。望月清司さんは還暦記念論文集の方の論文について、望月さんの周囲では「ホッブズからスミスへの市民社会の発展」という発想があまりないと葉書で知らせてくれた。もっと良いものを書こう、と内奥に深まる熱い力を感じた。望月さんは入職直後、「図書館を見たら」と私に勧めた。その蔵書に圧倒され自分が小さく感じたが、すぐ「よし、もっと勉強するぞ」という意欲が湧いてきた。

(3)『現代の理論』・『資本論』研究 ― 専修大学入職まで ―

[『資本論』研究と『現代の理論』]　卒業後、民間企業に就職したが、2 年で辞めて帰郷した。父の急逝という家庭の事情と研究したい希望のためである。父が死んだときゼミの友人に知らせたら、伝え聞いた長洲さんはすぐ、「私も父を亡くしたとき、背骨を抜かれたような気持になった」と手紙で書いて、私をいたわった。民間企業では生産管理と会計が仕事であった。産業の現場の一端を覗いた程度であるが、貴重なことを学んだと思う。生産労働者に乞われて、英語や数学を昼休みに教えた。その後の 13 年間は高校教員である。定時制高校 2 年間、商業高校 11 年間、合計 13 年間、高校生を教えた。定時制高校生は、前の職場と同様ほとんど工場労働者であった。ちょうど「見上げてごらん夜の星を」が流行っていた。その歌を夜の文化祭で私のクラス全員が大声で合唱した。その間、友人たちと『資本論』研究会をつくり勉強し続けた。北関東に移ってからも、長洲さんとの縁は切れなかった。帰郷して 3 年後、論文「『資本論』の認識構造」を長洲さんたちが支える雑誌『現代の理論』の 1969 年 6 月号に載せてもらった。それが機縁で、『《資本論》と現代』(三一新書、1970 年 7 月 15 日)を刊行することができた。29 歳の時の著作である。雑誌『現代の理論』は長洲さんのポケットマネーで運営された月刊雑誌であった。新しい日本を創るための独立した雑誌である。スィージーの *Monthly Review* がモデルかもしれない。事務所は「飯田橋」駅近くにあった。自分の考えを雑誌で公表するために自立した資金を自力で作ること、これが長洲さんの実践哲学である。研究資金がないから研究で

きないなどという者に社会が求める研究はできない。このことを長洲さんから学んだ。先にふれた「神奈川サイエンスパーク」も同じ考えで運営されている。剰余資金を第三セクターで生み出し、その資金は技術者を育てるために使う。その考えに共鳴する人たちと協力体制をつくった。伝統的な「左右」の区別は問題外だ。狭隘な党派的利害より普遍的利益のために生きようと主張し実践したのが長洲さんである。特定の外部組織が公共機関を掌握し、その資金を独占＝支配する「党＝国家組織(party-state system)」がいま、世界規模で批判の的になっている。崩壊するのはそのソ連型システムである。台頭する市民社会はそれを解消する。

1970 年の「ニクソン・ショック(ドル＝金兌換停止の発表)」のとき、たまたま休暇で京都に滞在していた長洲さんは急遽、東京に戻って『現代の理論』で特集するために編集会議を開いた。行動の人である。北関東で日中国交回復運動に参加していた私が文革の最中の 1971 年夏、中国に行く予定を報告したら、「人間をみてきなさい」と助言してくれた。その報告が『現代の理論』(1971 年 11 月号)に掲載した「中国参観記」である。猛暑の中国全土を廻った。西安から小さな飛行機で辿り着いた延安では下放文革青年と会った。私たち訪問団が当時の日本の情勢を説明し、文革について疑問を出しても、彼らは寡黙であった。文革期中国に行くのは文革派であるとの徒党的な偏見のなかで、岸本重陳さんがその報告の文体をほめてくれた。

[『《資本論》と現代』]　先に書名をあげた小著『《資本論》と現代』(1970 年)は肌理の荒い本である。論理の筋書きだけのような本である。もっと面白い書き方をすれば良かったと反省する。約 40 年前のこの本の核心はその後の時代に耐えてきたか。以下、検討する。

小著は「賃金労働者の自己認識の書物として『資本論』を読む」を主題にした本である。図(51 頁)に円を描き、その円心で交差する水平線と垂直線を引く。水平線の下部は人間の物質的生活を示し、上部が精神的生活を示す。垂直線の左側が「深層構造(真理の世界)」(労働過程・協業・交通の世界)を示し、右側が「表層構造(虚偽の世界)」(商品・貨幣・資本の世界)を示す。円心に実践的志向をいだく認識主体をおく。円心から認識される世界が重層的に螺旋形に拡大する。真理の世界は虚偽の世界に転化＝変身して現れる。資本主義に生きる人間には「物」が「価値」をもつ商品として現れる事態が円心から右に描かれる。それがマルクスのいう疎外＝物象化であると主張した。小著のあと同種の主題の本がいくつか出た。最近、1840 年ベルリンのマルクスがこの視点を定礎したことを知った(内田弘「マルクスのアリストテレス『デ・アニマ』研究の問題像」『季報 唯物論研究』No. 102、2007 年 11 月)。疎外(Entfremdung)とは、近代的私的所有制度が事物を分離すること、物象化(Versachlichung)とはその分離されたものが虚偽の結合様式で現象することである。この事態が『資本論』では全三部、Verwandlung で連鎖すると記述されている。普通、「転化」と訳されている Verwandlung はカフカの小説の題名『変身』として訳されている。『資本論』の場合もその意味である。マルクスはシェクスピアが好き

だった。商品が貨幣に変身する、貨幣が資本に変身する、資本が生産した剰余価値がさらに資本に変身する。変身(metamorphose)の重層的連鎖が資本主義である。

［廣松涉『資本論の哲学』］　廣松涉は拙著刊行(1970 年 7 月)のあと、雑誌『現代の眼』(1973 年 5 月号以降)に連載した論考を『資本論の哲学』(1974 年)にまとめて刊行した。1 冊贈ってくれた。そこで廣松涉は Verwandlung を「舞台回し」と理解した。「変身」の近傍をおさえた理解である。両方とも演劇学的(dramaturgisch)である。廣松涉は、学知的認識者(マルクス)が資本主義認識の「舞台を回す」と理解した。私は大学での演劇部の経験から、俳優は変身の合間に舞台裏に帰り、化粧を落とし衣装を脱ぎ、素肌の人間に戻る。ついで別の化粧を施し別の衣装を纏い変身して、舞台に出ることを経験している。貨幣の資本へ転化(変身)論の直後は労働過程論であり、その直後に価値形成＝増殖過程論がくるように、虚偽の世界から真理の世界に戻り、真理の世界から虚偽の世界へ出てゆく。廣松涉は「舞台裏」を見落としていないか。廣松は小著贈呈への返事(1970 年 7 月 15 日刊行の 5 日後の 20 日、足立区で投函)で、こう書いてきた。「(『《資本論》と現代』の)第三、第四章をもっと詳しく展開していただきたいとか、かの論文(「『資本論』の認識構造」)を含めて、私にとって感銘の深かった点、教えられた点など、拝眉の機会を得て申し上げたいと存じます」。後に廣松涉の大学卒業論文を読んで知ったことであるが、廣松の当時の問題関心は真偽論を中心とする新カント派的な認識論であったから、彼の問題関心のポイントは見当がつく。だが語り合うために、廣松涉に会うことはなかった。彼と最初に挨拶を交わしたのはその 6 年後、「社会思想史学会」の創立大会(1976 年 11 月、明治大学)においてである。斜め前の席で頻繁にリレー式に煙草を深く吸い、黙考する廣松涉の秀麗な横顔が印象に残る。

［日山紀彦『《抽象的人間労働論》の哲学』］　問題の関連上、やむをえず時期を最近に移し、直に戻る。小著刊行(1970 年)から 37 年の後に、日山紀彦が廣松涉『資本論の哲学』の内在的批判を目指した大著『《抽象的人間労働論》の哲学』(御茶の水書房、2007 年)を出した。その書評論文を『アソシエ』(第 18 号、2007 年 8 月)に依頼され書いた。その書評論文で『資本論』の理論核心は価値形態＝交換過程論の理解にあること、つまり小著『《資本論》と現代』で論証したことを再確認した。廣松涉＝日山紀彦は「価値形態論中心論者」であり、交換過程論を軽視・無視する。宇野弘蔵は、商品所有者の使用価値への欲望が流通形態を成立させるとみて、価値形態論から実体規定を排除し、価値実体は労働＝生産過程で生産されるという。廣松＝日山からすれば、それは「労働者」が「価値なるものを注入する」とみる「価値実念論(value realism)」である。それは「人格」が物に「所有意志を注入する」と「物件」になると考えるヘーゲル(『法＝権利の哲学』)に類似している。廣松＝日山は価値の実体は交換の「関係態」であるという。彼等は価値形態論で用語「商品所有者(Eigentümer)」をつかう。彼らの価値形態論は小生産者

を前提とすることになる。その前提は資本主義的生産様式が支配する諸社会という『資本論』の前提に反する。宇野派から批判される弱点である。宇野の場合も商品所有者である。しかし、それは資本家である。マルクス自身は、価値形態論では商品を主語＝主体としての「商品が語る」と書き、商品の人格化として「人(ein Mann)」を前提する。交換過程論で初めて消費欲望をもつ「商品所持者(Warenbesitzer)」が登場する。この区別を無視しては、価値形態論と交換過程論の関連がはっきりせず、マルクスが如何なる問題を解こうとしていたかが不分明になる。

［移行問題の核心＝理論から実践へ］　価値論の核心は宇野＝廣松論争には存在しない。価値論のアポリア(難関)は、価値形態の第二形態から第三形態への移行はいかに説けるか、にある。マルクスの価値形態論を批判する宇野にはこの問題は不存在である。宇野の論法よりも、廣松＝日山の価値形態中心論のほうが、「個物と一般」をめぐるアリストテレス以来のアポリアと(それとは自覚せずにだが)格闘している点で学術的に高い価値をもつ。第二形態における特殊な諸商品の使用価値による価値の表現は限界がない、未完である、特殊的個物(異種の使用価値)をいくら累積しても一般(価値)に到達＝抽象することはできない。廣松＝日山は第二形態から第三形態への移行は学知者の視点移動がもたらすという。日山は、視点移動の障害物をなくすため両形態上の差異を消す。廣松はそこまで踏み込まなかった。しかし、第二形態の相対的価値形態の商品の次元と等価形態の商品の次元とは異なるので、視点は移動できない。学知者の視点移動は、移動する理論的必然性を明示しないかぎり、学知者の恣意というより廣松＝日山の恣意にまかされることになる。それは論証ではない。廣松渉のいう「学知者」は、彼の卒論が証拠づけるように、新カント派的な認識主観である。レーニンもそうである。新カント派の《個別的なものを結合する判断一般》は《ばらばらの民衆を統一する前衛党》＝無謬認識装置説の哲学的根拠になっていないだろうか。それはキャッチ・アップ段階の後進国知識人が頂点に立つ「ピラミッド・モデル」である。そのモデルは大学卒業者が過半数を占める「多主体間相互作用ネットワーク型」の先進国に妥当しない。『資本論』のモデルはそのネットワーク型である。線形代数では『資本論』を数理経済学として解けない。「ポアンカレの三体問題」を解く数学が「マルクス・モデル」に対応するだろう。

小著『《資本論》と現代』で指摘したように、第二形態から第三形態への移行は、商品所有者の無自覚の「行為」が解決する。その解決経路の理論的可能性を論証するのが価値形態論である。小著刊行の後で知ったが、ヘーゲルがアリストテレスにしたがって採用した「類推」ではなくて、マルクスのいう「行為」が、アリストテレスの「第一実体(個物)」と「第二実体(形相そのもの)」の矛盾への答えである〔詳論は内田弘『《経済学批判要綱》の研究』(1982 年)、同「再生産関係態としての価値形態」『専修経済学論集』1996 年 7 月刊参照〕。マルクスは『要綱』でアリストテレスのいう「個物＝第一実体」を「自然的実体」として、「形相そのもの＝第二実

体」を「社会的実体」として再定義する。マルクスが「実体」と書いたら、それは、この二つの実体のいずれかを判断しなければならない。「社会的実体」とは限らないのである。ハナ・アーレントはマルクスの多義的「労働」概念に関し「マルクスは混乱している」と誤解し、それを無批判に引き継ぐ日本の研究者がいる。自然的実体が「分離＝結合」する虚偽の様式、即ち「社会的実体の体化物」が貨幣である。マルクスにとって、「神」はブルジョア経済においては「近代的所有によって疎外＝物象化された関係」なのである。価値形態論(theoria)と交換過程論(praxis)の関連を小著『《資本論》と現代』(1970 年、101-102 頁)で明示したことは、37 年後に日山紀彦の廣松渉批判を読むさいの視点となった。

［岸本重陳の『《資本論》と現代』評］　さて、小著刊行直後に戻る。長洲ゼミ 2 学年上の岸本重陳さんに小著『《資本論》と現代』の書評を『現代の理論』(1970 年 9 月号)で書いてもらった。小著刊行 2 ヵ月後の速さである。彼が挙げた問題点を整理すると、①「構造弁証法」なる私のアイデアは一見するとニートだ(neat 手際良い)が、『資本論』にはもっと複雑な論理がある。②冒頭商品に賃金労働者を含めるのは読み込みすぎである。③大塚久雄批判は行過ぎである。大塚のいう「人間の論理」をもっと重視せよ。④著者・内田弘は「市民社会＝商品世界＝近代資本制市民社会」と等置し、結局「市民社会＝資本主義」と考えていないか、この 4 点が批判点である。小著が私の周囲で話題になると、なぜか、必ず岸本さんのこの書評が引合いに出された。私は《いや、若いときの小著ですから》と対応しておいた。今が、応えるときである ― 岸本さんは長い闘病のあと、長洲一二さんのあとを追うように、亡くなったが、提起された問題は岸本さんの死を超えて普遍的である。

［『資本論』を貫通する論理とは何か］　第 1 点の「手際よすぎる」との批判に対しては、では『資本論』は「一読了解」か、と尋ねたい。岸本さん自身、「(『資本論』を)読みおわっておのずと明瞭とならぬようなことならば、その不透明さをこそ、全体の論理をきたえあげることによって正すべきだと思う」と書いているではないか。私はその「全体の論理」を探求して「構造弁証法」を提示したのである。岸本さんは内田の「構造弁証法」は「論理の一方向的展開としての形式に偏っているのではないか」とも批判した。これは誤解である。宇野弘蔵が『経済学批判要綱』「序説」の「上向法」のみを科学的方法として採用し「一方向的展開」な理解を示すからこそ、「分析(**遡及**)と総合(**前進**)で螺旋をえがく構造弁証法」を提示したのである。内田義彦さんの『資本論の世界』(岩波新書、1966 年)がある。小著執筆(1969 年)にも参照した。ところが、『資本論の世界』には正面切った価値論がない。価値論は『資本論』の土台ではないか。価値論イジリでない『資本論』全体の論理構成がわかる価値論、資本主義が見えてくる価値論がほしい。或る畏友もそこが不満であった。内田義彦さんに価値論を書いてほしいと求めると、「価値論？ いや、むずかしくってねぇ」と応えたという。

マルクスは、圧縮して書くことを好む、と自認していた。しかし、それは複雑化を意図したものではない。意図的複雑化は大抵、権威への気兼ねか、問題の核心が分からずに打つ逃げの手である。『資本論』形成史における価値形態論の先行的確立(1857 年『経済学批判要綱』)、価値形態と交換過程の交互併存(1859 年『経済学批判』)、価値形態論と交換過程論との区別＝接合(1867 年『資本論』初版)という歩みが、アリストテレスのアポリア「二つの実体[個物と形相一般]をいかに統一するか」とのマルクスの格闘の軌跡である。小著では、価値形態論と交換過程論の次元の相違を明示した。その土台づくりで、その後、アリストテレス以来の Aporetik に連結して、マルクスの経済学批判の基礎として価値論を理解する足場を構築することができた。私の「構造弁証法」と類似した廣松渉の「四肢的構造論」からする『資本論の哲学』(1974 年) が出たことで、岸本さんの「ニート」批判は相対化されたと思う。

［総生産物商品化小生産者社会は存在可能か］　第 2 点は、私にとって意外な批判であった。マルクスは『資本論』で書いている。「商品であるということこそは、資本主義的生産様式の生産物の支配的で規定的な性格である。このことはさしあたり、労働者そのものはただ商品販売者、したがって**自由な賃金労働者**として登場し、したがって労働は総じて賃金労働として登場する、ということを含む」(ゴチック体は引用者)。どこに書いてあるか。知りたければ、『資本論』を再読されよ。『資本論』冒頭商品論ですでに、労働力の再生産ファンド＝必要生産物(賃金財)もすべて商品化している事態が想定されている。それが証拠に第 1 部冒頭第 2 文節で商品を「消費手段と生産手段」に区分している。マルクスがいう「自由な賃金労働者」は産業革命以後に生まれる。それ以前の「流血立法」下では存在しえない。総生産物の商品化(物象)と労働力の商品化(人格)は同じ事態の両面である。マルクスがそう書いているから正しいというのではない。その記述は論理的に正しいのである。

いま、生産手段か消費手段かのいずれかを生産する独立小生産者からなる「総生産物商品化社会」を仮定する。彼らは、①単純再生産や(家族労働という労働者数制約内での)拡大再生産のために、自家生産していない消費手段または生産手段を、それを生産している他の小生産者から購入するために、自家生産物の特定部分を販売しあう。さらに、②上記の「総生産物商品化仮定」から論理的には、その特定部分以外の部分、即ち、自家生産＝自家消費するはずの部分も商品化している。例えば、消費手段(馬鈴薯野菜)の小生産者が直接消費するはずの消費手段(馬鈴薯野菜)も商品化していることになる。彼らは直接に自家消費するはずの部分を一旦売り買い戻すか、同じ種類の生産物を他の生産者から買うはずである。これはありえない矛盾した行為である。つまり、上記の仮定そのものが誤りである。その社会像は「市民社会の理念」たりえない。では、自家生産＝自家消費してきた消費手段・生産手段までが商品化する過程とはなにか。その過程は、自家生産＝消費物も含む総生産物が独立小生産者の所有(労働と所有の

同一性)でなくなり、彼らのほとんどが自己の労働力再生産のための消費手段(賃金財)も他人(資本家)所有として生産し、その生産物は他人(資本家)が販売する(労働と所有の分離)ようになる過程＝原蓄過程である。彼らは賃金財購入資金を自己の労働力を資本家に販売し獲得するようになる。彼らは賃金が「流血立法」(最高賃金法)で生存線に抑えられる「不自由な」賃労働者である。「自由」なのは資本家である。賃金労働者はやがて産業革命で陶冶され労働力の等価交換を求め「流血立法」を撤廃し、資本家に妥協させ「自由な賃金労働者」になる(『資本論』第1部第8章「**労働日**」)。この結果に『資本論』**冒頭商品**が対応する(**遡及＝前進**)。

［冒頭商品論の複眼的問題像］　冒頭商品論は基本的に無産者的労働者の自己認識の始点である。冒頭商品は資本の生産過程で働いてきた賃金労働者の「結果」である。街には富が溢れている。それらは自分たちが生産した結果である。なのに、われわれは貧しい。なぜか。驚きから学問は始まる(アリストテレス)。この「結果」から物事を反省＝**遡及**するのが賃金労働者である。不可解な結果からその原因＝「出発点」を探るのが『資本論』の一方の記述順序である。他方、資本家は資金をいかに増やすか、「出発点」から「結果」を予想＝**前進**する。『経済学・哲学草稿』、『経済学批判要綱』、『資本論』はこの「遡及＝前進の複眼的視座」に立つ。資本主義は循環するシステムである。「結果」は「出発点」でもある。冒頭商品論から始まる『資本論』は、賃金労働者の貧困原因探求と資本家の巨富獲得期待が二重化する記述である。上向法のみが科学的方法であると宇野弘蔵のように判断してはならない。賃金労働者の眼(下向法)と資本家の眼(上向法)の複眼的統一が『資本論』の方法である。

［大塚久雄のいう「人間」とは誰か］　第3点は大塚久雄さんが力説する「人間の論理」の「人間」とは誰かが問題である。上記の第2点と関連する。大塚さんは、価値形態の第二形態から第三形態への移行は「物＝商品」でなく商品所有者でもなく「人間」が自覚的に行うという。この「人間」とは何者か。不明である。この点を批判したのである。今思えば、大塚さんたちが戦時体制で直面した問題はなんだろうか。「男性ブルジョア独裁」である「第1次市民革命」＝明治原蓄国家が武断的に推進する産業革命から賃金労働者が生まれる。彼らは「自由な賃金労働者」となるべく「参政権」と「社会法」を要求する。その要求は用語「民主主義」が登場する大正デモクラシー＝「第2次市民革命」の骨格をなす。それを大正末期からの戦時体制準備が打ち砕く。「戦後改革」は、「アジア・太平洋戦争」で挫折した直接生産者の要求する「第２次市民革命」を継承＝再建する。「第 1 次市民革命」は男性ブルジョアの革命である。第 2 次市民革命は男性財産所有者の男性無産者への歴史的妥協である。第1次と第2次は区分すべき異なる歴史事実である。この二つの市民革命は「近代的人間」の達成に一括できない。大塚さんのいう「人間」はその「近代的人間」であろう。あたかも第1次市民革命が元来第2次市民革命と同じであると見る、連続主義的な近代像を大塚さんはいだいている。その誤解は、1789

年のフランス人権宣言の原理は「自由・平等・**友愛(fraternité)**」である、という誤解に関連する。今でも、そう誤解している人文学者・社会科学者がいる。近代史の無意識の偽造である。無論その原理は「自由・平等・**所有(propriété)**」である。「所有」とはブルジョア的所有権である。所有権をブルジョアに限定するため勤労者弾圧法**「ル・シャプリエ法」**がフランス革命中に制定され承認される。ブルジョアは同盟者(勤労者)を切り捨てる。その排除を直視したい。

［市民社会発展史］　マルクスは『資本論』で産業革命以後に存在可能になった「自由な賃金労働者」と彼らを雇用する資本家を主題にしている。イギリスの「流血立法史」下では、産業革命までは、「自由な賃金労働者」が存在しえない。彼らは「不自由な賃金労働者」であった。イギリス・ブルジョアジーは産業革命中**「治安維持法」**(1819 年)を制定する。日本でも産業革命の最中、明治維新後の自由民権運動や勤労者の自由要求を弾圧する**「治安警察法」**(1900－26 年)を制定する。その強化が「アジア・太平洋戦争」へ誘導する、日本の「治安維持法」(1925－45 年)である。「普通選挙法」(1925 年)に嵌めた箍(たが)である。与えた「自由」を制限する措置である。日本でも自由であったのは資本家と地主であった。既得権者はあとから権利を拡張し既成秩序に参入しようとする者を排除し弾圧する。その不自由の首枷が撤廃されるのは、英仏では 19 世紀の産業革命以後、日本では戦後改革を待つ。市民社会の歴史は参政権・生存権の範囲を拡張する闘いの歴史である。イギリス参政権承認は都市商工業者に 1832 年、都市労働者に 1868 年、農村労働者に 1885 年、女性には 1928 年である。これが議会制民主主義の祖国イギリスといわれる国の実態であった。その 1928 年にロレンスの『チャタレイ婦人の恋人』が刊行された。これは偶然の一致ではない。この書物は 20 世紀初頭にも残るイギリス貴族制批判である。彼女は貴族制の垣根を越えて(fraternize)、森番と結ばれたのである。階級の壁を超え「自然生命」に回帰したのだ。女権を主張し斬首された清末期の秋瑾と、チャタレイは「第 3 次市民革命」の先駆的象徴である。フィクション・チャタレイには歴史的リアリティがあるのだ。

［フライディ問題］　岸本重陳さんは、後述する『コメンタール 経済学批判要綱』(上)の『経済学批判要綱』「序説」論で、「ロビンソン＝フライディ問題」を提起した。ロビンソンは独立しているが、彼に従属する奴隷フライディを所有している。大塚久雄さんはなぜロビンソンだけを独立生産者の理想として取り上げ、フライディを捨象したのか。ロビンソン物語刊行は流血立法の時代(1719 年)である。デフォーの実業は何か。大英帝国内奴隷制撤廃は 1833 年である。そのとき帝国外にはまだ奴隷はいた。ロビンソン人間類型が輩出する西洋においてのみ(nur im Okzident)、近代資本主義は成立可能であるという。その「ヴェーバー・テーゼ」は今日なお理念だろうか。21 世紀世界に大きく参入する中国やインドには市民社会が形成できないのか。巨大金融＝資源利害が世界大に張り巡らす関係のみが人類を結びつけるのか。いまや「奴隷所有者の市民社会」とは形容矛盾である。ジェファソンも奴隷所有者であった。アメリカ独立宣

言の人権概念の現実的限界である。その限界をリンカーンが突破する。その時代は西部劇映画の背景となった、アメリカの領土拡張の時代である。その拡張運動でアメリカはペリーを日本に派遣する太平洋国家になり太平洋戦争で日本を破る。少年のとき小遣いを貯め地方都市の小さな映画館でよく西部劇映画をみた。インディアン(アメリカ先住民)が騎兵隊(米陸軍の前身)にライフル銃で撃たれ馬から落ちると、「アジア・太平洋戦争」の敗戦国日本の少年たちは歓声をあげスクリーンに向かって拍手する。少年たちよ、きみたちの祖国はどこか。祖国はない方がよいのか。三木清は戦時中に、第2次大戦後の日本への「アメリカニズムの浸透」に注意しようといった。彼は欧米を深く広く研究したが、その崇拝者ではなかった。欧米を正面から突破しようと提唱した。ヨーロッパからアメリカにきた移民が取得した土地は先住民の大地である。移民は大地略奪＝独立自営農民となった。満洲事変(1931年)以前から周到に準備された「満洲移民」も同じ略奪である。聴きづらい、思い出したくないが、歴史事実である。見たくないものを見る、これが社会科学の立場である、とは内田義彦さんの言葉である。

連帯するには(solidify)、垣根を超えなければならない(fraternize)。《先住民も人間である》という、確認すること自体が恥ずかしい真実をいまようやく人類は認め始めた。アメリカで公民権法が成立した1964年以後も人種差別は続いた。やっといま、バラク・オバマ大統領が登場してきた。これは出発点にすぎない。少年のとき北関東の公民館で、レオナルド・ダ・ヴィンチのデッサンの写真版を見た。レオナルドの《物を切り取るような描線》に魅了された。イタリア嫌いの大塚さん、レンブラントは良くて、なぜレオナルドはいけないのか。大塚久雄さんが文化勲章を受章した直後、内田義彦さんが教員室にいる私の前の席に座り、「大塚さん、勲章をもらっちゃいましたねぇ。宇野重吉さんの場合は仕事柄、まぁ、良いとしても」といって、机の上で両手を組み、暗い表情で沈黙した。内田さんは1週間後も同様に嘆いた。忘却できない記憶である。ある日、生田校舎の坂道を歩きながら、内田義彦さんは「内田(弘)さん、人間、牙を持たないと生きていけないね」といった。内田さんは『歩み』で「幸徳問題」を書いた。私は拙著『三木清』で、三木清もその問題と命がけで格闘したと指摘した。

内田義彦さんは、叙勲には無関係であったが、朝日新聞社「大佛次郎賞」を受賞したときは本心から喜んだ。『図書新聞』の編集者から依頼され、受賞作『作品としての社会科学』の書評を書いた(1981年3月21日号)。早速、内田さんから拙宅に電話がかかった。「書評、ありがとう。うーん、そうだなぁ、単なる繰返しではなくて、風景が変わるロンド形式の文体だね」と満足そうである。約6000字のノートを取り長い書評を書いた甲斐があった。数年後、内田さんの教え子の落合幸二さんが『ロビンソン・クルーソーの世界』(彩流社、1984年)を刊行したとき、私は『朝日ジャーナル』編集部に依頼され、その本を書評した。掲載直後、すぐ電話が鳴った。「書評、ありがとう。著者の意図をよくまあ、あそこまで深く読んでくれたね。でも、少し

褒めすぎじゃないの？」といいながら、嬉しそうであった。

［《市民社会＝資本主義か》という反省］　岸本重陳さんの指摘する第 4 点は市民社会論である。『資本論』や他のマルクスの著作に「市民社会」を読み込むという問題は当時の私の主要課題ではなかった。それよりも『資本論』を一掴みにしたいという論理主義的傾向が強かった。実際、小著『《資本論》と現代』(1970 年)で私は「市民社会において資本に自己の力能をうばわれ、無として現存するわれわれが、商品としての自己を批判する」(73－74 頁)、それが『資本論』であると書いた。しかし同時に、再生産過程で維持＝発展する「富としての人間」概念を提示している(67 頁)。さらに「市民社会が生産力の体系であり、分業＝協業の社会システムであるというスミス的内容がマルクスの歴史観のなかに揚棄され、包摂されている」(208 頁)と指摘している。小著で「歴史貫通的」という内田義彦固有の用語を用いて「生産有機体としての人間社会において人間諸個体が**歴史貫通的に**形成し組織する社会的分業」(96 頁。ボールド体は引用者)とも書いている。『資本論の世界』(初版 1966 年)からの影響である。しかし今浮かび上がるのは、小著執筆当時(1969 年)の私が、生産力体系としての市民社会を「労働過程」でなくて「分業＝協業」で規定したのは、なぜかという問題である。この問題は『ドイツ・イデオロギー』理解に関連している。今思えば、私はイタリア・マルクス主義の影響を受けた構造改革派の『現代の理論』に寄稿しながら、平和移行の可能性の探求は市民社会研究の形態をとるという大切な問題を十分には自覚していなかった。それで長洲さんは、内田義彦さんや望月清司さんたちがいる専修大学に私を送ったのであろう。長洲さんは私の専修大学入職に際し推薦文を書いてくれた。入職してからまもなく、その問題の重要性に気づいた。長洲さんの還暦論文集に寄稿した論文で「ホッブズ的段階からスミス的段階へ」という視座から日本を観るようになった頃(1970 年代後半)から、私に市民社会論が根づいてきた。岸本重陳さんは非常に重要な点を私に指摘してくれたのである。岸本さん、ありがとう。

［市民社会発展三段階論］　私は現在、市民社会は三段階をへて発展すると考えている。上記の第 2 点で一部略記したように、第 1 次市民革命＝男性ブルジョア革命、第二次市民革命＝男性ブルジョアの男性プロレタリアへの歴史的妥協、と考える。今進行中の第 3 次市民革命は「①男女の共生（gender)、②健常者･障害者の共生（handicapped)、③多数民族・少数民族の共生(minority)、④人間・自然の共生（ecology)」という「四つの共生」を原理とする。その四つの共生は「生命根源における共和」で統一される。その意味で第 3 次市民革命は「生命革命」であろう。日本の、①男女雇用機会均等法(1998 年)･②障害者基本法(1993 年)･③アイヌ新法(1997 年)・④環境影響評価法(1997 年)は、日本の「第 3 次市民革命」の象徴である。「**農業革命**」が第 1 次市民革命を促し、「**産業革命**」が第 2 次市民革命を促した。第 3 次市民革命を促すのは、「良き生活の質」をもとめる人々の勤労能力(work capability for better quality of life)を社会的・

実質的に保障する「**能力革命**(capability revolution)」であろう。その意味で J. B. ロールズと A. K. センは重要である。アメリカ、日本などについて、このような市民社会発展段階が明瞭に観察できる。いまこそ、市民社会概念は、「歴史貫通的な普遍概念」を具体的に媒介する「歴史的段階区分可能な経験概念」に再定義しなければならない。市民社会概念を市民社会形成の規準に転換しよう。市民社会の発展史に関連して最近、雑誌『FORUM OPINION』(2008 年 7 月)に講演記録「市民社会の三段階発展論 ― 東アジアの歴史理論的現段階の位置づけをめざして ― 」を発表した。さらに先行歴史研究から深く学び、この理論仮説を発展させたい。

[《心貧しき者》とは誰か]　岸本重陳さんは小著『《資本論》と現代』への書評でもう一つ重要な点を指摘した。彼は「人間存在の本源的な全体性というべきものは、各人の人間としての存在の事実そのもののなかにあるのではあるが、だからこそ、すぐれた宗教が目覚めよと人に呼びかける理由もそれなりにあるのだが、しかし社会過程として、社会構成体として、自立せる諸個人がその連関を達成したことはない」と書いた。岸本さんのこの文は小著のつぎの個所と関連する。即ち、『聖書』のいう「心貧しき者(the poor in spirit)」とは誰のことか。根本的には、物質的に貧しい(poor)からこそ、宗教権威(教会)に貢物を捧げられない。そのため信仰心が浅い、精神的に貧しい(poor)と決めつけられ、なんと、自分で自分を責めている人々、祭壇に自分の「貧しい心」を捧げている人々のことである。宗教権威は自虐信者を作り出し支配する。そう書いた個所(193 頁以下)は、岸本さんの指摘と対照しあい、岸本さんの「個人的自覚先行説」を逆照する。しかし、岸本さんはその個所に言及しなかった。私の宗教的偽善批判を拒絶したのだろうか。岸本さんとの最後のお別れ会はキリスト教会でおこなわれた。

貧困問題は幼い頃を回顧させる。父が満洲国牡丹江から北京へ出張し留守中の 1945 年 8 月 8 日、ソ連軍が満洲に進撃してきた。急遽、私たち母子 7 人は客車、貨車と乗り継いで逃れ、父とは生き別れた。逃走中、吉林で敗戦(満洲国崩壊)を迎え、南新京(長春南部)に移り約 13 ヶ月住んだ。そこは国共の戦場となり、難民住宅も被弾した。1 歳に満たない弟は、母が食事不足で乳が出なく野草では生きられず、その敗戦年 12 月 30 日に餓死した。2 日後の 1946 年元旦は家族全員が暗く思い沈み迎えた。栄養不足・下痢で痩せ細った 3 歳の妹は、母がやっと手に入れたわずかな餅を旨そうに食べた。その 1 月の零下 30 度以下の極寒の或る朝、母と 12 歳の姉が食物を求めて留守中、突然、強盗男性 2 人が怒号をあげ玄関を破って押入ってきた。留守番の 10 歳と 8 歳の姉 2 人と 6 歳の私は、驚いて炬燵を離れ、部屋の隅に縮こまった。強盗 2 人は貴重な布団をすべて奪っていく。炬燵に温まっていた 3 歳の妹は、炬燵布団を強盗に剥ぎ盗られ驚き、櫓(やぐら)だけになった炬燵の前に、震えながら座っている。強盗は奪った布団を玄関前に停めてある馬車に満載し、私たちに怒声をあげ去っていった。姉 2 人と私は風呂敷をみつけ炬燵櫓に掛け、妹と一緒に残り火で凍える体を温めようとすると、強盗が破った玄関戸がバタンと

揺れ打ち寒気が吹き込んできた。買出しから姉と帰宅した母は驚愕した。が、すぐに事態に対応した。その 12 歳の姉と一緒に、近くの河原から長い枯草を沢山刈り取ってきた。母は布切れを縫い合わせ大きな袋を作り、子供たちに手伝わせて、枯草を詰め入れ、約 3 メートル四方の分厚い枯草布団を 2 枚作った。畳に敷いた枯草布団の上で、強盗に見つけられなかった数着のシューバ(毛皮のオーバー) や綿入れ服を被り、その上にもう 1 枚の枯草布団を掛けて、母子は雑魚寝し暖め合い寒さを凌いだ。

さらに痩せゆく妹は、やがて「目が見えない、見えないよぅ」と訴えるようになり、母代りをつとめてきた 12 歳の姉に何かに怯えてしがみつき、泣いて離れなかった。が、1946 年 2 月 12 日、弟のあとを追うように餓死した。母は、痩せ切った妹の遺体を抱き、嗚咽しつつ「しっかり生きよう」といって、妹の遺体を囲み泣いている子供たちを励ました。木箱に納められた小さな亡骸は、コトコト音を立ててリヤカーに曳かれ、近くの寺の墓地に硬く凍つく土を掘って土葬された。日本人僧侶が読経した。帰国前 1946 年 9 月、妹と弟の遺骨を抱き帰国しようと母姉たちと寺を訪れると、誰もいない。墓地一面は草原に変わっていた。墓碑はすべて木製で、薪にすべく誰かにみな抜かれていた。目印がなくなった墓地で遺骨を求め、ここか、あそこか、と彷徨よった。母の考えで墓地に転がる小石を二つ、二人の遺骨に見立てて拾った。帰国する私たちを乗せた列車が南新京の駅を走り出したとき、墓地が見えてきた。母に促され皆で墓地の妹弟に向かって合掌した。生き残った母子はアメリカが設置した日本人引揚用の港町・葫蘆島(ころとう)から帰国した。帰国後しばらくの間、遠く地底に葬られた妹と弟が《兄ちゃん、迎えに来てよぅ》と呼んでいるような気がする。その度に、妹弟の声を聴こうと地に寝転び、じっと地に耳を当てた。 ― 遠方の妹弟を鎮魂し、今は亡き母を讃嘆し母に感謝する。

[『マルクスの思想的原像』]　小著『《資本論》と現代』を出してから 4 カ月後、1970 年 11 月に、オーギュスト・コルニュの二つの論文を訳して『マルクスの思想的原像』と題して社会評論社から出した。31 歳のときの仕事である。3 年後には、その増補改訂版が出た。

① Auguste Cornu, Karl Marx: *Die Ökonomisch-philosophischen Manuskripte*, Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Heft 57, Akademie-Verlag, Berlin 1955.

② Auguste Cornu, *Marx's Thesen über Feuerbach*, Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Heft 84, Akademie-Verlag, Berlin 1963.

がその原著である。コルニュから礼状が届いた。より発展したマルクス論を執筆中であるとあった。コルニュは青木靖三訳『マルクスと近代思想』(法律文化社、1956 年)ですでに日本に知られていた。

[『経済学批判要綱』研究会]　時期が少し戻るが、長洲さんに小著『《資本論》と現代』をお贈りしたところ、すぐに返事をいただいた(1970 年 7 月 16 日鎌倉消印)。そこには「『《資本

論》と現代』、おめでとう。早速ご恵送、深謝します。講座マルクス主義、第８巻、資本主義のグループで、研究会をつづけています。いずれ、また、まとまった仕事をしたく、大兄もひとはだぬいでくれるつもりになっていてください。岸本君に幹事役になってもらう考えです。取り急ぎ、一筆御礼のみ」と書いてあった。その構想を実現すべく、1970 年代の始めに、井汲卓一さん、長洲一二さんが中心になって「講座マルクス経済学」を出すために、研究会を日本評論社のなかにつくった。そのメンバーの二人、望月清司さんと森田桐郎さんが中心になって、日本評論社のその研究会のなかに『要綱』研究会を作った(すでに 1960 年代後半に専修大学に『経済学批判要綱』研究会が発足していたことはごく最近知った)。その『要綱』研究会に入れてもらった。北関東から月に１回、土曜日、時間休暇を取り、早起きして上京し研究会に参加した。経済学者はテキストをこのように読むのか、ということを初体験した。特に、望月清司さんの『要綱』「貨幣に関する章」の「依存関係史」の個所を「なめるように」(望月さん自身の言い方)、読む手法には新しい学問文化に触れたような気分に陥った。しばらくその興奮は冷めなかった。『経済学批判要綱』という本の存在を最初に知ったのは、長洲さんのお宅で『資本論』のゼミをおこなったときである。二階の書斎に昇る階段の踊り場にある書架に、第２分冊まで刊行されていた『要綱』の翻訳書の背表紙を目撃した(1960 年９月下旬)。その後、原書は現代の理論社の或る畏友の自宅にあったのを見た。見るかい、と友に勧められた。すぐに極東書店から原書を買った。

そのうちに、『コメンタール《経済学批判要綱》』を上下２分冊で出すことになり、私は「資本章概観」と「資本章」冒頭の「貨幣の資本への転化」を担当執筆することになった。下巻には「貨幣章と資本章の区分個所について」と題する文献学的な研究論文を発表した。のちに、大谷貞之介さんが評価した。原稿執筆が一応終わると、その報告会で検討した。私は「資本章概観」について、「貨幣章」における「時間の経済(＝自由時間の増大)」という人類史貫通的な課題に資本主義は(無意識に)「固定資本の発展＝自由時間増大の可能性」というかたちで応えるという報告した。参加者一同が賛成してくれた。小著『《資本論》と現代』の論理主義的探求が『要綱』のあの錯綜した論述の密林に一筋の道を見つけ出す力になった、と今にして思う。沖浦和光さんは、研究会が開かれている日本評論社から『現代の理論』の編集長である安東仁兵衛さんに即刻電話をかけ、その報告要旨を『現代の理論』の 1974 年２月号に「マルクス主義と労働」というタイトルで執筆することとなった。その延長上で、同誌に同じ年の 1974 年 12 月号のために「マルクス主義における自由」と題した報告・討論を、杉原四郎さんと沖浦和光さんと一緒に、沖浦さんの勤務先・桃山学院大学でおこなった。「貨幣の資本への転化(むしろ移行)」の個所は、『資本論』の転化論を参考に整理して書いた。本学入職(1975 年)後、或る論文で、その個所は《自己を解体する矛盾は根拠に帰還する》というヘーゲル論理学を下敷きにして、

マルクスが執筆したことを明示した。この研究は後の『中期マルクスの経済学批判』(1985 年)の「第 3 章 『経済学批判要綱』とヘーゲル論理学」の基礎となった。日本評論社での研究会は『要綱』研究だけでなく、講座の他の巻のための研究会も開かれ、ほとんど参加した。長洲さんが司会役で、どうなるかと思われるほど白熱する議論を手際よく整理した。長洲さんは、私を第一線の研究者たちの議論に参加させ、訓練してくれたのだと思う。

[『危機の文明と日本マルクス主義』]　その後も、『現代の理論』にはたくさん論文を書かせてもらった。その成果の一部をまとめたのが『危機の文明と日本マルクス主義』(田畑書店、1974 年 2 月)である。現代の理論社で安東さんはその本を手にして「書名が大きすぎないか」と冷やかした。もっとおとなしい書名がよかったかなと思った。が、本書の前半の「地球破局とマルクス主義」、「開発思想を超えて」、(望月清司『マルクス歴史理論の研究』の書評論文『図書新聞』1973 年 10 月 13 日を含む)「文明・アジア・マルクス主義」などの論文、後半の「アジアへの眼」と題して、竹内好論、むの・たけじ論、文革期の中国参観記からなるアジア思想論は 21 世紀初頭のいまも、無意味とは思えない。今日の日本のマルクス研究者も、地球環境問題と中国インドを含むアジアといかに向かい合うのか、未決である。現代中国は如何なる体制か、中国は社会主義国か、資本主義国か。中国は世界資本主義といかなる関係を結んでいるのか。なにを目指して進んでいるのか。問題はますます重大になってきた。「マルクスとアジア」といえば、『《資本論》と現代』も最終部はアジア論である。同じ問題枠で考えていたのである。そこには私の 2 歳から 7 歳までの在満経験(1941－1946 年)が根づいている。

(4)『経済学批判要綱』研究・自由時間研究・三木清研究 ― 専修大学入職以後 ―

[『経済学批判要綱の研究』と『中期マルクスの経済学批判』]　本学入職後 7 年目と 10 年目に『要綱』研究書を 2 冊出した。『経済学批判要綱の研究』(新評論、1982 年)は、「序説」・「貨幣に関する章」・「資本に関する章」からなる『要綱』を一貫した論理で読み破るという苦心作である。小著『《資本論》と現代』を書くために『資本論』を体系的に読んだ経験が論文「資本章概観」という拠点を構築し、『要綱』の全体を貫徹する論理構成を読み取る力となったと思う。「文明としての資本」が「パックス・ブリタニカ」の世界市場を展開し、無意識に「真の富としての自由時間」を胚胎してゆく傾向を自由な賃金労働者が見出し、それを我がものとして、ポスト資本主義社会が構築されてゆく。これがその小著の主題であった。本書は長洲一二先生に捧げた。平田清明さんがその書評を『朝日ジャーナル』に書いてくれた。平田清明さんは、私が困っているとき拙宅まで電話をかけて、慰め励ましてくれた。最後となった出会いでは、私の両手を握って、なかなか離さなかった。

マルクスは書簡で『要綱』を書くさいにヘーゲル『論理学』が多いに役立ったと書いている。『資本論』形成史研究者として、この重大な問題点は無視できない。しかも、ヘーゲルもマルクスもアリストテレーカーであることを自覚していた。その意味で「マルクス＝アリストテレス関係」と「マルクス＝ヘーゲル関係」とは緊密に連関するし、自由時間論を基礎づける。「貨幣章」全体の思惟過程をきちんとフォローすること、これは難関だった。ヘーゲル『小論理学』が導きの糸となった。「マルクス＝アリストテレス関係」では意外なことに西田哲学系統の研究書や三木清『アリストテレス形而上学』が参考になった。アリストテレス『形而上学』＝観念論という単純で誤った先入観が支配するとき、西田学派への戦後の批判がなお生きているとき、アリストテレスや西田学派や三木清に虚心に耳を傾けた。気兼ねしないでよかったと思う。批判されるものにも合理的核心があるかもしれない。アリストテレスの『形而上学』や出隆の『アリストテレス哲学入門』を手引きに『要綱』を読み返すと、マルクスの論理構成が鮮明になってくる。アリストテレスの四原因論は『要綱』の自由時間論を論証する理論となった。「文明としての資本」は人類史の悲願である「時間の経済（必要労働時間の短縮）」にいかに応えるかという「自由時間問題」をマルクスは『要綱』で解いている。拙著の個々の論点に関しては批判があった。それらに応えるのが学問上の礼儀であると判断して出したのが『中期マルクスの経済学批判』（有斐閣、1985 年）である。『要綱』の非体系的な用語から『要綱』体系を解釈する研究や、アリストテレス四原因のひどい誤解にもとづく拙著批判は、忌憚なく「注」で反論＝批判した。「マルクス＝アリストテレス関係」については数ページに及ぶ長い反論を書き、「マルクス＝ヘーゲル関係」では「第 3 章 『経済学批判要綱』とヘーゲル『論理学』」で全面的に展開した。宮崎犀一さんが『書斎の窓』の書評で、この問題については、私のこの解明が「最初にして最後の研究」と評価してくれた。

［ ***Marx's Grundrisse and Hegel's Logic*** ］　この「第 3 章 『経済学批判要綱』とヘーゲル『論理学』」は、イギリス、ブリストル大学に留学中（1986 年 8 月～1987 年 7 月）、現在の Routledge、（旧）Kloom Helm の編集者に英訳することを勧められた。在英中の後半（1987 年 2 月～6 月）の時間をその英訳に集中した。引用しようとした『小論理学』の英訳が誤訳だらけで、ヘーゲルの原文から全部訳しなおした。英文のチェックを当時ケント大学にいた David McLellan に相談したら、彼はブルストル大学の Terrell Carver を推薦した。Carver に依頼したら快諾してくれた。拙訳をみてもらったが、著しい変更はなかった。しかし、驚くべき文体に改稿することがあった。例えば私が Acknowledgement の原稿で、How many times I have enjoyed to command the beautiful night view of Bristol.と書いたら、Carver は、How often I have enjoyed the commandingly beautiful view of Bristol at night. と訂正した。その中の ‘commandingly beautiful’ に感嘆した。Appendix の原稿で、The *Grundrisse* is divided by our analysis into the following major sections that

relate to Marx's *Capital*.と書いたら、Carver は This analysis breaks the major chapters of the *Grundrisse* into sections that relate topically to Marx's later work in *Capital*.と直した。特に 'breaks' という動詞と'topically'という副詞に感嘆した。'topically' は、私の三木清研究におけるレトリック論と響きあったのである。原稿に *Marx's Grundrisse and Hegel's Logic* というタイトルをつけて Routledge に送って、1987 年 7 月に帰国した。原稿はレフェリーにかけられ、それをパスして、1988 年に刊行された。McLellan が *London Times* に書評を執筆してくれた。直に二刷が出た。原稿が完成した頃、それを読んだ Carver は、This is a very good book.と賞賛した。紹介文(Introduction)を本書の冒頭に書いてくれた。その紹介文の草案を見せてくれたとき、その初めに、本書が私と Terrell Carver との共同研究の成果であると書いてあったので、その部分は削除してもらった。この本は、すでに 1985 年に有斐閣から出た研究書の一部（第 3 章）と、それに関連して執筆した論文「『経済学批判要綱』の実体規定」(『社会科学研究所月報』1985 年 4 月号)とを合体して訳したものであり、新しい研究成果というのは正確ではないと説明し了解してもらった。サッチャー政権になって、大学教員の業績報告が厳しくなってきたころのことである。この本を最初に引用したのは、LSE で統計学を教えていた Cyril Smith だった。彼は *Marx at the Millennium*（Pluto Press, 1996)で、「マルクス自身の方法の記述[「序説」第 3 節　経済学の方法]を、なんとかして、リカードウやヘーゲルの方法と同じものであると示そうとする。これは、ほとんど一般的であるといえるほどだ。私が知っているその例外は、他にあるかもしれないが、Hiroshi Uchida の本である」(p. 130。傍点強調は原文、[ ]は引用者補足)と指摘した。いまはインターネットを検索すると、この英訳本に言及し論じるサイトがたくさんある。『エンサイクロピディア・ブリタニカ』のサイトの「Hegelism」に、この本の紹介とその序文が掲載されている。この最初の英語本は亡き父母に捧げた。

[『要綱』研究のドイツ語訳と中国語訳]　帰国後、Terrell Carver, *Marx & Engels: The Intellectual Relashionship*, Wheatsheaf Books LTD 1983 を翻訳し世界書院から 1995 年に『マルクスとエンゲルスの知的関係』として出した。英文をみてもらったお礼の表現である。この翻訳本はすぐ二刷になった。長期留学中の東西ドイツ訪問(1986 年 8－9 月)で、Frankfurt am Mein で会った Walter G. Neumann が上記の英訳書をドイツ語に訳してくれた。*Logik der Produktion: Marx's Grundrisse und Hegels Logik*, herausgegeben und eingeleitet von Walter G, Neumann, Verlag für die Gesellschaft 1994 がそれである。専門用語は私がチェックした。そのあとも、Carver との共同研究は続いた。その一つが、*Marx for the 21st Century*, Routledge 2006 である。これは経済学史学会が刊行する英文論集の第 4 集の責任編集者として学会総会で私が選出され、刊行したものである。Carver に英文を見てもらった。そのため、2005 年 1 月から 3 月まで Bristol 大学への(本学の)短期留学を活用した。二度目の Bristol 留学でも英文書を刊行することになった。その留

学中、ハイデルベルク・マールブルク・パリを訪れ留学中の三木清の住居跡の写真を撮った。著書『三木清』の口絵にするためである。Carver とのもう一つの共同研究は、イタリアのナポリ大学出身の Marcello Musto が編集した、*Karl Marx's Grundsisse*, Routledge 2008 である。Marcello は *Marx's Grundrisse and Hegel's Logic* で私を知り、私に連絡してきた。私は Carver を Marcello に紹介した。折り良く、ちょうど二人が日本に来ていたときである。この本に Carver はマルクス疎外論に関する論文を寄稿し、私は日本の『要綱』研究史に関する論文を執筆した。

私の『《経済学批判要綱》の研究』は、『中期マルクスの経済学批判』の「第三章 『経済学批判要綱』とヘーゲル『論理学』」を入れて、北京師範大学出版社から 2009 年に刊行される。監訳者が韓立新さん、翻訳者が王青・李萍・李海春のみなさんである。韓立新さんは望月清司さんの『マルクス歴史理論の研究』(岩波書店、1973 年) を中国語に翻訳している。まもなく刊行されるだろう。《畏友の著書と一緒に》ということが嬉しい。2007 年 9 月の夏季休暇中、北京の韓立新さんが勤務する清華大学の哲学部で拙著の翻訳上の諸問題について、かなり詳細な打合せをおこなった。その合間に散策した清華大学の緑深いキャンパスは翌年 2008 年、北京オリンピックのマラソン・コースの一部となり、中継でテレビに映った。ランナーのスピードに合わせて走るロケ車から、どうやら清華大学の教職員の集団と思われるグループが数秒映った。韓立新さんがいるかもしれない、と直感した。後に日本で再会した韓さんに尋ねると、「ええ、あそこにいましたよ」と答えた。清華大学に群立する、学生全員入寮の高層白亜の学生寮や安価な価格で旨い食事を提供する広大な食堂をみると、中国は大きな矛盾をかかえつつも、その矛盾を解決する長期戦略を強かに実行していると痛感する。

[『自由時間』の刊行]　『経済学批判要綱』の研究は、《では、日本の自由時間問題はどうなっているか》と問いかけた。その答えを求めて様々な文献や統計データに当たり考えた。浮かび上がってきたのは、「洗練された資本主義(sophisticated capitalism)」というイメージである。その研究は『自由時間』(有斐閣、1993 年)となった。その頃、消費者満足度だけでなく、従業員満足度が調査され始めていた。ワークシェアリング・時短・メセナ・フィランソロピー・NPO・NGO・ボランティアなどが動き始めていた。最近の金融不況でも富山県の漁業業界では、労働時間短縮＝自由時間、若い従業員の仕事満足を基軸に活動する会社が誕生している(NHK「経済羅針盤」)。現在の経済危機で元気になるのは倒錯である。『蟹工船』では、将来は見えない。

この危機は、冷戦体制崩壊＝国家独占資本主義終焉が生んだ過渡的な資本主義の消滅であろう。これから資本主義は欧州社民型資本主義に向かう。世界銀行が危機以後を開く戦略は「グリーン・キャピタリズム」である。「環境・雇用・成長の問題」の解決である。海外ファンドが日本の環境技術に投資している。車社会アメリカのカリフォルニア州の南北を縦断する新幹線計画に州民の過半数が賛成した。しかも、原発再評価が始まっている。1929 年の恐慌のとき、

乞食が街にあふれ出た。現在の失業者は乞食をしない。阪神大震災のとき(1995 年)、被災者を救援する宗教団体が入信を勧めた。被災者は「紐つき救援」を拒絶した。日本人は自立した市民になったのである。sophistication には二面性がある。「洗練 sophistication」の語幹 sophist は弁論術を教え、詭弁術も教える。そのニュアンスを引いて「洗練」には、①実質的な向上と②そう見せかける詐欺という二重の意味がある。マルクスも相対的剰余価値は「搾取の洗練された方法」であると指摘している。資本主義は「生命過程そのもの」に、音楽・スポーツ・デザイン・絵画・文学・都市空間・環境などの手法で、活路を開いてきた。この危機でも、その路線は捨てない。その路線「洗練された社民型グリーン資本主義」でこの危機を克服してゆくだろう。それは「第 3 次市民革命」に対応しようとする資本主義である。基本的に、資本主義の洗練の「実質化」を推進するイニシアティヴをにぎることが、資本主義を制御する現代市民になる活路であろう。資本主義をただ外部から批判するだけの「革新」は、開発独裁時代の知識人の系譜が時代からずり落ちた姿である。長洲一二さんは「予見力」をもつことを革新と定義した。将来の選択可能性を分析し、それからベストを選び、実行することが革新であるといった。『自由時間』については『東京新聞』に長いインタビュー記事が載った(1993 年 7 月 9 日)。同僚の玉垣良典さんが、その本の自由時間思想史の章と新しい概念「時短投資」を評価してくれた。その本の執筆経験から「仕事について考える」というゼミのテーマが浮かんできた。

[『三木清』の刊行]　2004 年に御茶の水書房から『三木清－個性者の構想力－』を出した。1960 年代に刊行された最初の『三木清全集』を購入したが、三木清研究は彼のレトリック学を読むことから始まった。先述の長洲一二先生還暦記念論文集に寄稿した「多元社会日本の思想像」を執筆することがきっかけとなった。『要綱』研究のあと、三木清研究論文を 1990 年から 8 本書いた。その間、ロンドンからの留学生を含め大学院生の指導にも力を注いだ。その論文を再構成したものが『三木清』である。刊行後まもなく二刷になった。《三木清とはなにか》については、まず『三木清』をお読みいただければと願う。三木清は正当に評価されてこなかった。彼の獄死の政治的背景を隠蔽しようとする者たちの陰惨な動きがその原因のひとつであろう。それに対して、小林勇・羽仁五郎・波多野精一・中井正一・中島健蔵・石堂清倫・荒川幾男・宮川透たちが三木清を正面から評価している。この系譜に自分を置いて、三木清から学んできた。内田義彦さんは《牙をもて》といった。《歴史は結局、公平である》と三木清は書いた。彼は歴史の取捨選択作用(abstraction 捨象＝抽象)を指摘したのである。人びとは結局、邪悪なるものを捨て、生きる糧となるものを残す。歴史は冷厳である。戦後日本の思想史研究家の中には、戦前・戦中・戦後、三木清から多くを学びながら、それを隠す者がいる。あの陰湿な動きを恐れてか。よせ。彼らは空虚だ。空虚を食べて自己延命しているのだ。

三木清はマルクスに、ヘーゲルに、カントに、スピノザに、デカルトに、パスカルに、マキャ

ヴェリに、アリストテレスに繋がる。三木清がハイデッガーから学んだアリストテレスも活用した小著『三木清』が刊行されてまもなく、ハイデッガリアン・木田元さんは、三木清の『アリストテレス形而上学』はアリストテレス研究でまず参照すべき文献であると薦めた(『毎日新聞』2004 年 11 月 7 日朝刊)。三木清はアリストテレスのアポリアから始まる、「個別的なもの」と「普遍的なもの」との関係をめぐる難問に正面から取り組んだ。その模索が彼の構想力論に集約される彼の研究史である。人間の将来構想力の探求である。その探究でカント・ヘーゲル・マルクスの Dialektik に関わる。その探究過程を論文「『構想力の論理』の問題像・形成過程・論理構造」であとづけた(『専修経済学論集』(2009 年 3 月刊)。この問題は、個々人(個別)はいかなる能力をもって市民社会(普遍)を構成することが出来るかという問題の基礎にある。市民社会形成問題はいま国境を超えている。三木清の東亜協同体論は東アジア市民社会形成に重要な示唆を与える。三木清の構想力研究は東亜協同体研究につながっている。しかし、人間の根源的な生存能力としての構想力の自由な使用は、無条件でよいのか。その問いは、三木清の場合、宗教哲学的課題(親鸞研究)となった。今では、地球は人間だけのものか、まして富者の独占物でよいかという環境＝生命問題となっている。その意味で、三木清研究は重大な課題を背負っている。この著書は妻・和子に捧げた。長い間の苦労に感謝するこころを込めて。

おわりに

光輝を放つ才能に魅せられて、人が集まり弟子たろうとする。学問の根源には情念がある。情念はいかに働くか。ある者は師の学問と寵愛を独占しようとする。ある者は師の不正確で小さな代弁者になる。ある者は師の光に涸れ焦げ落ちる。ある者は師に憧憬する自己が卑しく見え、師の欠点を探し出し有頂天になる。が、却って不安になり周囲に憂さ晴らしする。ある者は年下の弟子に超され嫉妬し陰湿に攻撃する。しかし、学問が追求する真理は誰も所有できない「超越」である。学問は結局、「信」にある。「童心」にある。しかも、学問は人生の一部にすぎない。師と弟子。喜びがあり葛藤があり喜悲劇がある。― 孔子は顔回のみを認めたという。無限に道を究める心を分かち合えると観たからである(白川静『孔子伝』)。一切は終わりなき問いである。既知は無知の別名にすぎない。人生には限りがある。問いは無限である。その矛盾がおもしろい。そう分かると、軽やかに楽しい。

あるとき、長洲一二先生のゼミを希望した学生が落とされた。学生はなぜ私を落としたのか、その理由を先生に問い質そうとした。先生は、学生を自宅に招き、その質問を聞いてから、良くわかりました。いや、私からお願いします、私のゼミにぜひ入ってください、と逆に求めた ― と、元学生は先生の逝去に際して或る新聞に書いた。先生の対応は、学生の熱意に応えないと、

学生に精神的傷を与えると慮ってのことであろう。元学生はいま、著名な作家である。長洲先生は人生の達人である。すでに亡くなった或る教授が生田の坂道を下りながら、「前の職場で皆に非難されているとき、長洲君だけは、優しかったね」と私に語った。

長洲一二先生は1919年(大正8年)7月28日に生まれ1999年(平成11年)5月4日に亡くなった。享年79歳であった。横浜国立大学経済学部教授を辞してから、神奈川県知事5期20年(1975年～1995年)を勤めたあと、わずか4年の余生であった。全力投球の20年であったためであろう。いや、79年の生涯が持続する全力投球であったにちがいない。没年の7月3日(土)、長洲ゼミによる告別式が長洲先生たちの創設した「神奈川サイエンスパーク」で行われた。ゼミの幹事会から指名されて、私が弔辞を読んだ。その夜、長洲先生のご遺族から電話があり、その弔辞の原稿のコピーを送ってほしいと依頼された。先生の遺影のある仏壇に納めたい、とのことであった。拙い弔辞であったが、お送りした。今も弔辞は先生のそばにあるだろう。

私は長洲一二先生の教え子である。先生を尊敬し先生に感謝している。拙宅の玄関には先生の遺影が飾ってある。日夜、対面している。しっかり生きようと思う。先生がいつもそばにいらっしゃるような気がする。他の長洲ゼミ生も同じ思いだろう。

定年退職は、制度上やむをえないとはいえ、私にとって「急ブレーキ」をかけられるようなものである。しかし、定年＝「停車」を見越して、教育・研究を「徐行運転」するつもりはなかった。学生と急に離れることになる。これは惜しい。彼らに語りかけると、元気をもらい、将来を考える力が湧いた。学生に語りかけることを仕事にしてきたことを幸せに思う。これまで、単著書10冊、編著5冊、共著19冊、論文69本、学会報告2回、翻訳3冊、市民講座(通年)3回、講演5回、対談3回、多数の書評などの研究を行ってきた(『専修経済学論集』第43巻第3号参照)。良い研究条件を提供してくれた専修大学に感謝する。

今日で満70歳、まだ元気である。時間は十分にある。やりたいこともある。これから為すことにも、少しは社会的意味があるだろう。当面、三木清研究をもう一冊と『資本論』形成史研究の著書を出す予定である。原稿もほぼ出来上がっている。三浦梅園の「価原」を彼の自然哲学から理解することも始めている。梅園の哲学は三木清の構想力論に繋がる。

人生、潔さが肝要である。《頑張ったじゃないか》と自分を静かにねぎらおう。時が少し経てば、在任期間も遠望できるだろう。そうである。気分一新、新鮮な気持で再出発することだ。書物を読み過ぎると、学問臭さが溜る(梅園)。晴れた日は妻と畑に出て、土を耕そう。

お読み下さり、ありがとう。(2009年2月11日、誕生日＝古希を迎えて)